

いたずらムジナ

昔々、江戸時代の中頃のこと、小山の横町にコンコンチキナのコン吉さんというあだ名の人がいたと。そのあだ名のようなく、きつね面ではなく、いつもにこにこしている童顔の大男で、草相撲の大関を張っていて、しこ名を狐川といったと。ある日、この人が、お宮の裏山で、古ムジナを捕まえたんだと。朝、昼、晩と、餌をやり、「狐とムジナは同類だ。」と言いながら、棒でつついてかわいがっていたと。ところが、なにしろ力持ちなのでムジナの方では痛いらしかった。そこである夜、ムジナは逃げてしまったと。紺吉さんは、あちこち探しまわったが見つからなかったんだと。

二、三日たったある晩、お宮の神主さまが訪ねてきたと。そして、毎晩、お宮に木盗人が来ると言った。このままでは、まわりの木がなくなって、お宮が丸裸になると言う。そこで紺吉さんは、明日とは言わず、今夜中に木盗人を捕まえると約束したと。

真夜中を過ぎて、紺吉さんは、お宮の境内をまわったが、木盗人はどこにもいなかった。社務所の戸をトントンと叩いたが、起きて待っているはずの神主さまは、なかなか出てこない。「こんな刻限に何事じゃ」と言いながら、やっと、神主さまは起きてきたと。紺吉さんの言い分を聞くと「狐川関が、キツネに化かされおったな。ははは。」と大笑いしたと。

そして、神主さまは、朝から腹痛を起こして、一日中寝ていたと言った。そこで訪ねてきた神主さまは、ムジナが化けたのだとわかった。神主さまに化けるような古ムジナは、何をするかわかったものではない。すぐに、退治しなければなるまい。紺吉さんは、木盗人を捕まえるつもりだったが、今度は、ムジナを捕まえる決心をして家に帰ったと。

その日の夕方、紺吉さんは、ムジナ退治のために、近所の人を呼び集め、ムジナがまた現れるのを待った。

夜も更けて、戸をトントンとたたく音がしたと。そこで、雨戸をがらりとあけた。ムジナがいたので、かしの棒で撲って捕まえた。そして、皆で相談して、明日、ムジナ鍋にして食べてしまおうと、四つ足を縛って、軒先にぶら下げた。

翌朝、ムジナの姿はなく、縄だけがぶらさがり、紙切れが残されていた。それには、こう書いてあったと。

コンコンチキナのコンキチさん  
いたずらムジナにだまされて  
腹立ちまぎれのムジナ鍋  
煮られぬ先に、はいさようなら

その後、ムジナは姿を消してしまい、近所で変わったことは何も起こらなかったということだ。